

KINDRED

キンドレッド

きずなの招喚



オクテイヴィア・バトラー 著
風呂本 惇子／岡地 尚弘 共訳

山口書店

KINDRED キンドレッド

—— きずなの招喚 ——

オクテイヴィア・バトラー 著

風呂本 惇子／岡地 尚弘 共訳

山 口 書 店

訳者略歴

風呂本惇子（ふろもと あつこ）

一九三九年生まれ。東京女子大学卒業。東京都立
大学大学院修士課程修了。

現在、神戸女学院大学文学部教授。

著書『アメリカ黒人文学とフォークロア』（山
口書店、一九八六）。

共著書『わたしたちのアリス・ウォーカー』（御
茶の水書房、一九九〇）、『わたしたちの世界文学』

（松香堂、一九九一）、他。

訳書『ある讃歌』（山口書店、一九九〇）。

共訳書『アリス・ウォーカー短篇集——愛と苦
悩のとき』（山口書店、一九八五）、他。

岡地尚弘（おかじ なおひろ）

一九五〇年生まれ。同志社大学卒業。同志社大学
大学院博士課程前期修了。

現在、徳島文理大学文学部助教教授。

論文「仮面を被った黒人たち——フォーク
ナーの作品における黒人像——」（徳島文理大
学文学論叢、一九九〇）、他多数。

キンドレッド

——きずなの招喚——

一九九二年一月八日——発行

著者——オクテイヴィア・バトラー

訳者——風呂本惇子

岡地 尚弘

発行者——三宮 庄二

発行所——株式会社山口書店

住所——〒606 京都市左京区一乗寺築田町七二

電話——〇七五（七八二）六二二

印刷——大誠印刷株式会社

定価——二、二〇〇円（本体二、一三六円）

© 1992 ISBN4-8411-0772-X C0097

キンドレッド 目次

プロローグ	1
河	5
火事	14
転落	62
争い	143
嵐	257
ロープ	329
エピソード	360
訳者あとがき	365

プロローグ

私は最後の帰還の旅で腕を失った。左腕だ。

その上、一生のうちのほぼ一年間を棒にふり、平穏と安定の多くも失ったが、これは失ってみて初めて貴重なものだともわかった。ケヴィンは警察から釈放されると病院へ来てそばで寝泊まりしてくれた。彼まで失ったわけではないと私にわからせるためだ。

でもその前に私はケヴィンが監獄に入る必要のないことを警察に納得させなければならなかった。それには時間がかかった。警察の人々は断続的に影のようにベッド脇に現れては質問をするのだが、それを理解するのに私は苦勞した。

「どうして腕に怪我をしたのです？」と彼らは尋ねた。「誰に怪我をさせられたのですか？」私は彼らの使った「怪我」という言葉に引っ掛かった。まるで腕に引っかき傷でも負ったみたいに聞こえるじゃないか。腕をなくしたことを私が知らないとも思っていないのかしら。

「事故です」という自分のささやき声が聞こえる。「事故だったのです。」

彼らはケヴィンのことを尋ね始めた。最初は彼らの言葉の単語がまざりあってぼやけてしまい、私はほとんど注意も払わなかった。でも、しばらくしてからその言葉を再生してみても突然私は悟った。この人たちは私の腕の「怪我」をケヴィンのせいにしてしているのだ。

「違うんです。」私は枕の上の頭を力なく振った。

「ケヴィンじゃないの。あの人ここにいます？ 会わせてもらえますか。」

「それじゃあ誰がやったんですか」と彼らは食い下がった。

私は薬の作用と微かな痛みの交錯の中でなんとか説明しようとしてみた。でも、この人たちに正直に説明などできるわけがなかった——したところで何一つ信じてくれるはずがない。

「事故ですよ」と私は繰り返した。「私の過失。ケヴィンのせいじゃありません。お願い、あの人に会わせてくださいな。」

何度も繰り返しているうちにやっと警察の人々の輪郭のぼやけた姿が私のそばを離れ、目が覚めてみるとケヴィンがベッド脇に座って居眠りをしていたのだ。ふと、ケヴィンはいつこへ来たのかしら、といふかったがそれはどうでもよいことだった。大事なのは彼がそこにいてくれることだ。私はほっとしてまた眠りに落ちた。

ようやく目が覚めた時には、こっちも筋道の通った話ができ、相手の言うことも理解できそうな気分になっていた。ほとんど気分がよいと言ってもいいくらいだ。ただ、腕が奇妙な動悸を打っていた。いや、腕のあったところが。私は頭を動かしてその虚ろな場所

を……切り口を見ようとした。

するとケヴィンが立ち上がり、両手で私の顔を挟んで自分の方へ向かせた。

彼は何も言わなかった。しばらくするとまた腰を下ろし、私の手を取ってそのまま支えていた。

私はもう一方の手を持ち上げれば彼に触れるような気がした。もう一本の手があるような気がするのだ。そこをもう一度見ようとすると今度は彼もそうさせてくれた。ともかくも、私は自分でそうとわかっていることを受け入れるためにそこを見ないではいられなかったのだ。

しばらくして私は頭を枕に戻し、目を閉じた。「ひじの上からね」と私は言った。

「そうするより仕方がなかったんだよ。」

「わかってる。ただ慣れようとしていただけなの。」

私は目を開けて彼を見つめた。その時、さっきの面会人たちのことを思い出した。「私、あなたを厄介な目に合わせてしまったかしら？」

「僕を？」

「警察の人が来たの。これをあなたのやったことだと思つたのね。」

「ああ、そのことか。あの連中は保安官代理なんだ。君の叫び声を聞いて近所の人たちが電話したんだ。僕は尋問を受け、勾留されたよ、しばらく——しばらくつてのは連中のセリフだけだよ！——でも君が説得してくれたおかげで釈放してもよからうつてことになった。」

「よかつた。あの人たちには事故だつて言つたのよ。私の過失ですつて。」

「あんなことが君の過失で起こるなんてあり得ないよ。」

「それは論議の余地があるけど。でもあなたのせいじゃないのは確かですもの。まだ厄介な立場にあるの？」

「そんなことはないだろう。連中は僕がやったと思ひ込んでいるけど、目撃者がいないし、君も協力しないときている。それに連中にだつて考えつかないだろう、どうやれば僕があんなふうにな……君に怪我させる

ことができたものか。」

私はまた目を閉じ、怪我をした時のこと、あの痛みを思い出した。

「大丈夫かい？」ケヴィンが聞いた。

「ええ。警察にはなんと言つておいたの？」

「本当のことを言つたよ。」彼はしばらく黙つて私の手を弄んでいた。目を上げると、彼は私を見守つていた。

「あの人たちに本当のことを言つたりすれば」私の声は低かつた。「あなたはまだ閉じ込められているはずだわ——精神病院に。」

彼は微笑を見せた。「できるかぎり本当のことを言つたんだ。君の叫び声が聞こえた時僕は寢室にいた。何事かと居間へ駆けつけたら、君が壁の穴のようなどころから腕を引き離そうとしてもがいていた。僕は君を助けに行つた。その時、君の腕がただ引つ掛かつているのじゃなくて、どういうわけか、壁の中へめり込んでつぶれていることに気づいた。そう言つたんだ。」

「めり込んでいたわけじゃないのよ。」

「わかってる。でもあの連中にはその言葉を使うのがよさそうに思えたんだ——僕が事情を知らないことを示すために。それにそんなに曖昧な言葉でもないし。すると連中はどうしたらそんなことが起こるか説明しろって。で、僕はわからないと言った。……わからないって言い続けたよ。まいったね、デイナ、本当にわからないや。」

「私だって」と私はささやいた。「私だってわからない。」

河

私がそれに気づいたのは一九七六年の六月九日だったけれども、この問題はとうの昔に始まっていたのだ。でも私は六月九日という日を覚えている。あれは私の二十六歳の誕生日だった。あれは私がルーファスに会った日でもある。彼が初めて私を呼び寄せた日なのだ。

ケヴィンと私は誕生日のお祝いに何か特別なことをするつもりはなかった。二人とも疲れていてそれどころではなかった。私たちはその前日、ロサンジェルスのアパートから二、三マイル離れたアルタディーナに買い求めた自分たちの家へ引っ越してきたばかりだっ

た。私にとっては引っ越しがお祝いのようなものだった。私たちはまだ荷をほどいている最中で——いや、荷ほどきをしていたのは私だ。ケヴィンは自分の仕事部屋が片づくと手を止めてしまった。そこへ引きこもつてのらくらするか考えごとでもしていたのだろう。タイプを打つ音はしていなかったから。ようやく彼が居間に出てきた時、私は本を仕分けしながら大きな本箱へ収めているところだった。ここは小説だけにしよう。こんなにたくさん本があるのだからある程度区別して並べておかなければ。

「どうしたの」と私は尋ねた。

「なんでもない。」彼は近くへ来て床に座った。「ただ自分のあまのじゃくに苦勞しているだけさ。昨日引っ越しの最中に僕は例のクリスマス向けの話のネタを半ダースも思いついたんだぜ。」

「ところがいざ書こうとするとなんにも出てこないってわけね。」

「一つもだ。」彼は本を一冊手に取って開き、ぱらぱらと繰った。私は別の本を取ってそれで彼の肩を軽く

たたいた。彼がびっくりして目を上げる。私はその目の前にノンフィクションの本の山を置く。彼はみじめな顔でそれを見つめる。

「まったくもう。どうしてこんなところへ出てきちゃったんだろう。」

「もっとネタを思いつくためでしょ。要するに、あなたは忙しくしているとアイデアが浮かぶのよ。」

彼はじろっと見たが、その表情は見た目ほど険悪なものではないことを私は知っている。彼の目は色が薄く、ほとんど無色に近いので、実際にそうであろうとなかろうとよそよそしい怒っているような印象を人に与える。彼は人を威圧するのにこの目を利用する。見ず知らずの人たちを。私はにやにやと見返して仕事に戻った。しばらくすると彼はノンフィクションを別の本箱のところへ運んで行って、収め始めた。

私は身を屈め、本の詰まった箱をもう一個彼の方へ押しやった。その時めまいがして吐き気を覚えたので急いで身を起した。周りで部屋がぼやけ、暗くなっただろう。どうしたのだろうかといぶかりながらちよっ

との間本箱にしがみついて立っていたが、とうとうくずおれてしまった。ケヴィンが言葉にならぬ驚きの声を上げるのが聞こえた。「どうしたの？」と尋ねている。

頭を上げた私は、彼に焦点を定めることができないのに気づいた。私はあえぎながら「なんだか具合が悪いの」と言った。

彼がこっちへやって来る気配が聞こえ、灰色のズボンと青いシャツがおぼろに見えた。ところが、私に触れる寸前、その姿が消えてしまったのだ。

家も、本も、何もかも消えてしまった。突然、私は戸外にいて、地面にひざまずいているのだ。頭の上に木。緑の多い場所だ。私は森のはずれにいるのだ。目の前に幅の広い河が穏やかに流れている。河の真ん中のあたりで子供が一人、ばしゃばしゃやりながらかなきり声を上げている……

溺れているのだ！

私はその子の災難に反応した。自分がどこにいるのか、何が起こったのかという問いは後回しだ。今はと

もかくあの子を助けに行こう。

私は河へ向かって走り、服を着たまま水の中へ入り、子供の方へすばやく泳いで行った。そばへ着く頃には子供は意識を失っており——小さな赤毛の男の子で俯せに浮いていた。私は子供を仰向けにし、頭が水に潜らないようにしてしっかりと抱え、引つ張って行った。川岸で赤毛の女が私たちを待ち構えていた。と言うより、その女は岸辺で行ったり来たりして走り回り、泣き叫んでいた。私が歩けるところまで来たのを見た途端、女は水の中へ駆け込み、子供を受け取ると触ったり調べたりしながら岸まで運んで行った。

「息をしていないわ！」と女が甲高く叫んだ。

人口呼吸。見たこともあるし聞いたこともあるけれど自分でしたことは一度もない。今こそやってみなければ。その女は何か役に立つことのやれる状態ではないし、誰も他に見当たらない。岸に着くと私は女から子供を引ったくった。子供はせいぜい四つか五つで小柄であった。

私は子供を仰向けに寝かせ、頭を後ろにそらせ、口

移しの蘇生術を始めた。私が息を吹き込むたびに子供の胸が動くのが見えた。すると突然、女が私を殴り始めたのである。

「おまえは私の坊やを殺した！」と女はかなきり声を上げた。「おまえが殺したのよ！」

私は向きを変え、打ちかかってくる拳をどうにか捕まえた。「やめなさい！」私は精一杯威厳のある声で叫んだ。「この子は生きてるわ！」本当に生きているのだろうか。私にはわからなかった。神様、どうぞこの子を生かしてやって下さい。「坊やは生きているのよ。手を貸してやらなければ。」私は女を押し退けた。幸い、女は私より少し小柄だった。それから私は子供に注意を戻した。息を継ぐ間に目を走らせると、女はぱかんとして私を見つめている。次いで私の脇にひざをつき、泣き出した。

数秒後、子供は自力で息をし始めた——呼吸し、咳き、むせ、吐き、母親を求めて泣き出した。これだけやれるんならこの子はもう大丈夫だ。私は彼から身を離して座った。ちよつと頭がふらふらしたが、ほつ

とした。やったあ！

「生きてるわ！」女が叫んだ。彼女は窒息させんばかりに子供をぎゅっとつかんでいた。「おお、ルーファス、坊や……」

ルーファスだって。この小さな子はかなり顔立ちもよいのにそんな醜い名前をつけるとは。

抱いているのが母親だとわかると、ルーファスは精一杯のかなり声で泣きながらしがみついた。ともかくもその声に異常は認められなかった。すると突然、別の声をした。

「一体何事だ。」怒った厳しい男の声だ。

びっくりして振り向くと、これまで見たこともないほど長いライフルの銃身が目の前にある。金属のカチツという音がし、私の身が凍った。子供の命を救ったために撃たれるのだ。私は死ぬんだ。

しゃべろうとしたが、急に声が出なくなった。気分が悪くなり、めまいがした。視界がひどくぼやけて銃もその後ろにいる男の顔も見分けがなくなかった。女が激しい声色でしゃべっているのが聞こえたが、極

度の気分の悪さと恐怖に陥った私には彼女の言っていることが理解できなかった。

すると男も女も子供も銃も皆、消えてしまった。

私はまた自分の家の居間の、さっき倒れた辺りから数フィート離れたところにひざまずいていた。うちに戻ったのだ——びしょ濡れで泥にまみれてはいるが、傷も負わずに。部屋に向こう側にケヴィンが凍りついたように突っ立ち、さっき私のいたところを凝視している。

「ケヴィン？」

彼はくるっと身を回して私と顔を合わせた。「一体どうして……どうやって君はそっちへ行っただ？」と彼はささやいた。

「わからない。」

「デイナ、君は……」彼は寄ってきて、まるで私が本物と信じられないみたいにおずおずと触った。それから両肩をつかみ、しっかりと引き寄せた。「何があったの？」

きつくつかむその手を緩めさせようとして私は手を

上げたが、彼は離そうとしない。彼は私の傍らにひざまずいた。

「話せよ！」と詰問するように言った。

「どう話せばよいかわかっていれば話すわよ。痛いからやめて。」

彼はやっと手を離し、私が誰であるか初めてわかったみたいにまじまじと見つめた。「大丈夫かい、君。」

「いいえ。」私は俯いてしばらく目を閉じていた。体は脅えて震えていた。恐怖の余燼が体力をすっかり奪ってしまっていた。うずくまって我が身を抱き、震えを止めようとした。恐怖は消えたが、歯ががちがちいうのを抑えるだけで精一杯だ。

ケヴィンは立ち上がり、ちよつとその場を離れた。戻って来ると持ってきた大きなタオルを私の肩に巻いてくれた。これでいくらか気が落ち着いた私は、タオルをしっかり引き寄せた。ルーファスの母親が拳で殴った背中と肩に痛みがある。あの女は思ったよりきつく殴っていたのだ。その痛いところをさらにケヴィンにつかまれたのだった。

私たちは一緒に床の上に座っていた。私はタオルにくるまり、ケヴィンは私の体に腕を回していたが、彼がそこにいるだけで気分が落ち着いていた。しばらくすると震えが治まった。

「さあ、話してくれ」とケヴィンが始めた。

「何を？」

「全部だよ。何が起こったんだ？ どうして……どうやって君はあんなふうに動いたんだ？」

私は黙って座っていた。考えをまとめようとする頭狙いを定めたライフルがまた目に浮かんた。私はこれまで一度もあんなふうになんか陥ったことがなかった——あれほど死を間近に感じたことがなかった。

「デイナ」とケヴィンが低い声で呼んだ。彼の声はその記憶と私の間に隔たりを置いてくれるように思えた。それでもなお……

「どう話せばよいのかわからないわ」と私は言った。

「まったく突拍子もないことなんですもの。」

「どうしてびしょ濡れになったのか、まずそれから

話を始めてごらん。」

私はうなずいた。「河があつたわ」と私は始めた。

「河の流れている森があつたわ。それから、男の子が溺れていたの。その子を助けたわ。それでびしょ濡れになったの。」私はためらつた。考えをまとめ、わけのわかるようにしようとした。私の身に起こつたことはわけのわかることではないが、少なくとも筋の通るように話せるはずだ。

ケヴィンを見ると、彼が注意深くどちつかずの表情を保っているのがわかつた。彼は待つていた。私は気を落ち着けて、そもその始まり、最初のめまいに話を戻した。彼のために全部を思い出して——詳しく追体験した。自分では気がついたとも自覺していなかったことまで甦らせた。たとえば、近くにあつた木々は松で、高く真つすぐに伸び、ほとんどてっぺんのところには枝と葉があつた。私はルーファスを見る直前にどういふわけかそんなことまで気がついてたのだ。それにルーファスの母親についても特別なことを思い出した。彼女の服装だ。首から足まで被う長くて

黒っぽいドレスを着ていたのだ。ぬかるむ河岸であんなものを着ているなんて。それに彼女のしゃべり方のアクセント——あれは南部訛りだ。それからあの忘れようにも忘れられぬ長い凶暴な銃。

ケヴィンは口を挟まずに聴いていた。私が話し終わると、彼はタオルの端を持つて私の足から泥を少し拭き取つた。「こんなものが理由なくつくはずはないよね」と彼は言つた。

「私の言つたことを信じていないの？」

彼はしばらく泥をじつと見つめてから私の顔を見た。「君がどれくらいの間いなくなつていたか知っているかい。」

「数分でしょ。長くはなかつたはずよ。」

「数秒だよ。君がいなくなつてから僕の名を呼ぶまで、せいぜい十秒か十五秒だった。」

「あら、そんな……」私はゆっくり首を横に振つた。「あれだけのことがたつた数秒のうちに起こるなんてあり得ないわ。」

彼は無言だつた。

脅えて現れた。」

「そうだ。」

「そして私は自分の見たこともしたこともわかつて
いる——それは私の事実よ。どっちの事実も突拍子
もないけど。」

「どう考えればよいのかわからない。」

「問題はどうか考えるかということではないかもしれ
ない。」

「どういう意味だい。」

「つまり……こういうことが一度起こった。また起
こるとすればどうなるかしら。」

「まさか。そんな……」

「わからないわよ！」私はまた震え始めた。「あれが
なんであろうと、もうたくさん！　もう少しで死ぬと
ころだったのよ！」

「氣を楽にしろよ」と彼が言った。「何が起こるにせ
よ、またパニックを起こしちゃ君のためにならない。」

私は落ち着けず、身じろぎして辺りを見回した。

「また起こりそうな気がするの——今にも起こりそ

「でも本当に起こったのよ！　私、そこにいたの
よ！」私はぐっとこらえ、深呼吸してからゆっくり言
葉を続けた。「いいわ。私だってもしあなたがこんな
話をすればたぶん信じないでしょうね。でもあなたが
言ったように、この泥が理由もなくつくはずないわ。」

「そうなんだ。」

「ねえ、あなたは何を見たの？　何が起こったと思
う？」

彼はちよつと顔をしかめ、かぶりを振った。「君が
消えた。」彼はその言葉をむりやり絞り出したように
見えた。「ほんの二、三インチで僕の手が届きそうに
なるまで君はここにいた。それから突然いなくなつた
んだ。信じられなかった。僕はただそこに突っ立って
いた。そしたら君がまた戻ってきて部屋のかつち側に
いた。」

「もう信じる？」

彼は肩をすくめた。「そういうことが起きたんだ。
僕は見たんだ。君が消えてまた現れた。事実だ。」

「私はびしょ濡れで、泥だらけになって、死ぬほど

うな。ここにいても安心できないのよ。」

「自分で自分を怖がらせているだけだよ。」

「そうじゃないわ！」私は睨もうとして彼の方を向いたが、ひどく心配そうなその表情を見てまた顔を背けた。この人は私がまた消えるのを心配しているのかしら。それとも私の正気を心配しているのかしら。私は苦々しく考えていた。彼が私の話を信じたとはまだ思えない。「おそらくあなたの言う通りでしょうね」と私は言った。「そうであって欲しいわ。おそらく私は強盗かレイプか何かの被害者に似ているのね——生き残りはしたものの二度と安心できない被害者と。」私は肩をすくめた。「私の身に起こったことはなんと呼べばよいか知らないけど、二度と安心できない気分なの。」

彼はとても優しい声を出した。「もしまた起こっても、もし本当のことなら、子供の父親は君に礼を言わなければならんことがわかるだろうし、君に危害は与えないだろうよ。」

「そんなことわからないわ。何が起こるかわからない

いわ。」私はふらつきながら立ち上がった。「まったくもう。あなたがあやしてくれる気持ちはわかるんだけど。」私はちよつと間を置いて、彼に私の言ったことを否定する機会を与えた。でも彼は否定しなかった。「私、自分で自分をあやしているような気分になりかけているの。」

「どういうこと？」

「わからないのよ。この話全部が本当だったし、本当だったことはわかっているんだけど、どういうわけか段々遠退き始めているの。テレビで見たとかどこかで読んだとか——何か間接に知ったことみたいになりかけているの。」

「あるいは……夢みたいなのとか？」

私は彼を見下ろした。「幻影と言いたいね。」

「そう言ってもいい。」

「違うわ！ 私は自分のしていることがわかっているわ。目もちゃんと見えているわ。あんまり怖いからわりやりそれから離れようとしているのよ。でもあれは本当だったのよ。」

「それから離れることだ。」彼は立ち上がり、泥のついたタオルを私から外した。「それが一番よいことだと思うね、本当のことだったにしてもなかったにしても。離れちまえ。」